2018.7.23
No.208

編集・発行人　樋口みな子

E-mail
minginga@agate.plala.or.jp
URL http://www13.plala.or.jp/minginga/
郵便振替「銀河通信」
02740－7－56535
（郵送6号分1,000円）

小さな声を届けて３０周年になりました

赤岳からの北鎮岳（2017年７月撮影）

北海道では珍しく長雨が続きました。西日本ではさらに大きな集中豪雨で甚大な被害がでました。亡くなった方は２００人を超えました。また自宅が土砂に埋まった方たちは３万人を超えたとの報道に胸が痛みます。被害のすさまじさに言葉を失いました。心よりお見舞い申し上げます。

１９８８年７月１０日創刊の「銀河通信」がこの号で３０周年になりました。１９８６年４月２６日に起きたチェルノブイリ原発事故に衝撃を受け、「原発のない社会で暮らしたい」と親しい友人に小さな声を届けたいと思ったのが発行の動機でした。長い歳月の中でさまざまな困難にぶつかり笑顔でばかりいられない日々もありましたが、書くことで心の整理が出来たり「通信、楽しみにしているよ」という読者のお便りにどんなに励まされたかしれません。２０８号は読者からの寄稿で編集しています。２７人からいただきました。紙面の都合で次号にも続きます。

７月６日は植村隆さん名誉棄損訴裁判の札幌訴訟の結審でした。６６人の傍聴席に１１２人が並び、植村弁護団の席と傍聴席は埋め尽くされました。毎回満席です。

植村弁護団はこれまでの主張と訴えをまとめた最終準備書面を提出し、伊藤誠一弁護士（植村弁護団共同代表）と植村さんが最後の意見陳述を行いました。被告櫻井よしこさん側からの陳述はありませんでした。伊藤弁護士は、被告櫻井さんについて「日本軍慰安婦問題について自らとイデオロギーを共有するらしい数人の研究者と面談し、その書いたものを参照したことはあったようであるが、客観的資料に直接当たって、これを読みこむというジャーナリストとして最も基本的な営為を怠ったことが明らかになった」と批判しました。最後に、この裁判の意義に触れ「憎悪が一瞬にして爆発的に増幅されて拡散するというインターネット社会の特徴が巧みに利用されて、植村さんの名誉を傷つけられているという本事案について、司法的な解決を求めているこの訴訟に相応しい救済をしていただくよう、そして将来起こりかねない類似の例を予め防ぐに足る判断をしていただくよう、改めて求める」と述べました。

植村さんは「新聞記者になり、差別のない社会、人権が守られる社会をつくりたいと思って、記事を書いてきた。それがなぜ、こんな理不尽なバッシングにあい、日本での大学教員の道を奪われたのか。なぜ、娘を殺すという脅迫状まで、送られて来なければならなかったのか。なぜ北星学園大学の教職員や学生が巻き込まれ、爆破や殺害の予告まで受けなければならなかったのか」と緊張と心労で裁判に臨んだ日々を振り返り、金学順さんの言葉の重み、家族と支援者への感謝の思い、櫻井氏への批判を語りました。そして「絶望的な状況から始まったが、希望の光が見えてきたことを実感している。私は、もう一度、大きな声で訴えたい。私は捏造記者ではありません。裁判所におかれては私の意見を十分聞いて下さったことに感謝しています。公正な判決が下されることを期待しています」と結びました。

伊藤弁護士の明快な陳述と、植村さんの力を振り絞っての陳述に、目頭が熱くなりました。

判決は、１１月９日（金）午後３時３０分から、札幌地裁８０５号法廷で言い渡されます。たくさんの傍聴をお願いします。

自分のペースで生きていける福祉文化を創っていきたい 松浦幸子

2017.12.クッキングハウス３０周年を祝う会で左が筆者

チェルノブイリ原発事故のショック。原発のない社会で暮らしたいと、１９８８年７月１０日、銀河通信の創刊号。一人の市民が立ち上がり声を届けたい、できることを一緒にやっていきたい、と書き始めたのです。平和や原発、自然保護、人権問題にアンテナを広げ、一人でもいい、黙って見て見ぬふりはできない、自分の生き方に恥じることはできないと、思いを表現するようになった樋口みな子さん。小さな体で本当によくやってこられました。どこから汲めども尽きないパワーが出てくるのでしょう。しかもやさしく、しなやかに、笑顔で行動しているのです。通信の文章も自然で押しつけがましくなく素直に今起きている様々な問題を理解し、共感したくなる魅力を持っています。

私もほぼ同じ時期、１９８７年１０月に小さな心の居場所「クッキングハウス」を始めました。日本の精神科医療・福祉の貧しさに私の正義感が怒り、心病む人たちのやさしさが好きになり、共に街の中で当たり前に人間らしく暮らしたいと、ご飯を一緒に食べる活動をアパートのワンルームから始めたのです。

弱い立場の人たちが少しずつ力を寄せ合って、自分のペースで生きていける福祉文化を創っていきたいと思いました。何でも分け合って食べる食事は文化であり、孤立しないで、けっこう楽しくコミュニケーションしながら暮らしていけます。心の病気になったことを隠さないで、むしろ生き抜いてきたことを誇りに思える社会になったら日本の文化も豊かになるのではないかと、心病む人たちと玄米食のレストランも開き、地域の方々に喜ばれています。

２０１７年１２月、３０周年を迎えたクッキングハウスのソシオドラマ「いのちの輝き　希望のあかり」は５００席満席。みな子さんも北海道からかけつけてくれました。そして通信にレポートしてくれたのです。本当に嬉しかったです。

権力にゆだねることは毛頭考えず、自立した活動をしてきた小さな居場所のことをずっと見守り認めてくれている市民がいてくれることが何よりの勇気になります。やむにやまれず一人の市民が始めたことを、やはり一人から始めた市民が応援してくれている。このつながりを大切にしていきたいのです。困難を乗り越え、新しい豊かな知恵を発揮していく力は市民が持っているのです。この力を信じて希望の種を抱きながら、これからもお互いの活動を伸び伸びと明るくやっていきましょう。（調布市・特定非営利活動法人クッキングハウス会代表）

たくさんの読者を結ぶ大事なネットワーク　小野有五

「銀河通信」の創刊３０周年、おめでとうございます。札幌に移り住んだのが１９８６年ですから私の北海道での活動と「銀河通信」の歴史はほぼ重なります。樋口さんに最初にお会いしたのはいつのことだったか、もう忘れましたが、たぶん１９９０年に「北海道の森と川を語る会」をつくり、川の自然を守る運動を始めた頃ではなかったかと思います。まだ手書きだった、家族通信のような「銀河通信」をいただきました。私も、本州の友人たちに札幌に来てからのことを家族でつづった「ライラック通信」を出していたので、同じようなことをしている人がいることに励まされました。私の通信はじきに終わってしまいましたが、樋口さんはますますその内容を充実させ、すばらしい市民通信に発展させました。

樋口さんが山好きだったこともあり、高山植物の盗掘防止運動でも、ずいぶんお世話になりましたが、３．１１の原発事故が起き、泊原発の廃炉を求める訴訟を起こすことになったときは、忙しい樋口さんに「Hairoニュース」の編集を引き受けていただき６年間、すばらしいニュースレターを出していただきました。「銀河通信」の発行で培われた樋口さんの編集能力は、市民運動におけるフットワークの軽さ、講演会や本、映画など広いジャンルから自分にあったもの、人に伝えたいメッセージをくみ取り、それを限られた紙面の中で、的確に発信する力となり、さまざまな市民運動を支えてくれています。慰安婦問題で理不尽な攻撃を受けた植村隆さんの名誉棄損裁判でも、縁の下の力持ちのような樋口さんの活動が大きな支えになっています。

そのような樋口さんの原点は、つねに「銀河通信」です。その読者は６００人以上に拡がっているそうです。市民運動というのはとかく自分の関わる問題だけに集中してしまいほかの運動への目配りがなくなってしまうことが多いのですが、広い視野をもった「銀河通信」は、国内外に散らばるたくさんの読者を結ぶ大事なネットワークの役割を果たしてくれているように思います。私にとっては、なにより、忙しくて見に行けなかった映画や読めなかった本の樋口さんによる紹介を通じて、同じような関心、感性をもつ人たちとつながっているという思いを新たにすることができたことが、「銀河通信」を読む喜びでした。その発行を陰で支えてくださった、お連れ合いの澄生さんへの感謝も申し上げたいと思います。

（札幌市・行動する市民科学者の会
北海道事務局長）

みんなで守った美々川の自然

ドイツ国民の関心は環境から難民問題へ　今泉みね子

風力発電が見えるフライブルク

「銀河通信」３０周年おめでとうございます。この３０年は、私にとっては「第二の人生」、出来事の多い 年月でした。

１９９０年、東西統合という、歴史的な出来事の最中にあったドイツに移住。それ以来、住み続けてきたのは、以前の留学で惚れ込んでしまったフライブルク市。その頃フライブルクは、市の中心街への自動車進入禁止、公共交通機関の利用を促進する定期券など、当時としては先進的な環境対策を始めていました。

そもそも９０年代のドイツでは、一部の市民や環境市民団体による地道な環境保護運動がやっと実を結びつつありました。環境運動の中から誕生した「緑の党」が連邦議会でも議席を占めるようになり、９８年から２００５年まで連立政権を担うまでに発展しました。循環経済・廃棄物法、再生可能エネルギー法などが誕生し、現在では自明となった政策のほとんども、９０年代に成立しました。

私は、ドイツ語や英語の書籍の翻訳に加えて、このようなドイツの環境政策・対策や市民の活動を雑誌記事や本で日本に伝える仕事をするようになりました。その後、２１世紀に入ってドイツに帰化、やっと選挙権を得ました。

ドイツは２０１１年の福島原発事故の直後に脱原発を決定しました。２０２２年には最後の３基の稼働が止められる予定です。 再生可能エネルギー源による発電は、今では発電全体の３分の１以上を占めるようになりました。それでも、近年はドイツの環境政策や意識は頓挫、後退しています。温室効果ガスも自動車交通もプラスチック包装・容器も増える一方ですし、昆虫や野鳥の激減にも具体的な政策は出されていません。そして、 市民の関心はいまや環境よりも難民問題に向けられ、非民主的・国粋主義的な発言をする右翼政党が緑の党以上の支持を受けています。

「お手本になるような事例を日本に紹介する」をモットーとしてきた私は、こうした状況の中でいわばネタ切れ状態になりました。一番最近に書いた本のテーマは、目下の最大の問題である、大量の難民をかかえたドイツの状況です。

フライブルクに住んだ期間は、通算３１年になり当市は人生で一番長く住んだ町になりました。このまま、この地に骨を埋めることになりそうです。残されたわずかな日々をどう有意義に過ごすか、手探り状態の現在です。

樋口さんの「ひとりでもできる 市民運動が『銀河通信』の発行」という精神と実行力に感嘆・尊敬しています。

（フライブルク市・環境ジャーナリスト）

曇りがちな夜空から星空へと誘う銀河鉄道の軌跡　寺島一男

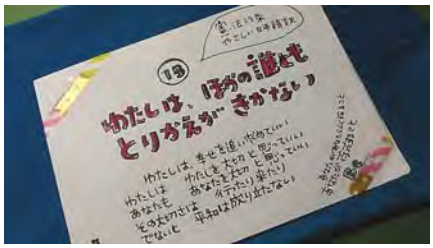
ペテガリ岳山頂で前列左から２人目が筆者とみな子さん

１９７４年１２月だった。映画「イタイ・イタイ」の自主上映をするため、大雪と石狩の自然を守る会の古びた会の事務所でチケットの中間集約をしていた。降雪を前に夕刻には小雨も降り出し時間を過ぎてもメンバーは数人しか集まらなかった。早々に切り上げようと思っていた矢先、髪を濡らして一人の女性が飛び込んできた。小柄で初めて見る顔だった。その彼女が藤田みな子さん（旧姓）である。街頭で映画を知らせるポスターを見て、事務所を知ったという。聞くと大阪の大手電器メーカーで公害分析の仕事をしていたという。願ってもない人が現れたものだとそのとき密かに喜んだ。当時は市民型自然保護運動の黎明期であったから、運動の手本もなく公害反対運動に学ぼうと、公害映画の自主上映や学習会、写真展などを始めた頃だった。ほどなくしてパルプ工場による水銀汚染問題が発生して、石狩川の環境問題に対する取り組みが本格化した。「襤褸の旗」、「公害原論１９７４」「水俣病ーその２０年」、ユージン・スミス、アイリーン・スミス写真展「水俣」（１９７９）、「水俣の図・物語」（１９８１）など次々と自主上映した。この間並行して鈴木哲さん、川本輝夫さん、坂本しのぶさん、石牟礼道子さん、柳田耕一さん、土本典昭さん、原田正純さん、宇井純さんら多くの関係者を招いて講演会や学習会を行ったその中心メンバーに彼女がいたことは言うまでもない。顔を出した翌年には事務局に入り、１９７６～１９７９年、１９８２～１９８４年と機関紙「ヌタプカムシペ」の編集長を務めた。１９７９年事務局次長、１９８０年運営委員、１９８１年事務局長と運動の要を担った。当初、体力がないからと尻込みしていた山登りも果敢に挑戦するようになり、山中泊の伴う厳しい現地調査にも参加した。

「銀河通信」を発行し続けて３０周年というこの驚くような活動の土台は、この旭川の時代に培われたのではないかと、これもまた密かに思っている。点の活動を続ければ線になり、線ができると道になり、その道はやがて自分以外の人も歩くようになる。「銀河通信」は、樋口みな子という一人の人間の生きた軌跡であるとともに、人々を、曇りがちな夜空から星空へと誘う銀河鉄道の軌跡でもある。心から祝したいと思う。

（旭川市・大雪と石狩の自然を守る会代表）

あなたもわたしも、ほかの誰ともとりかえがきかない 水野スウ



みなこさんの銀河のおたより、もう３０年になるんですね。社会に軸足をおいたこんな通信をずっと書き続けているみなこさん、きっと自分が今の社会をかたちづくっている、ちいさいけれど確かなひとかけらだ、って毎号感じながら書いているんだろな、と想像します。私自身、「いのみら通信」というささやかな便りを出すことで、社会のひとかけら感覚をやっと持つことができたので、北海道と石川、距離は遠いけれどもきもちは近い、どこか同志のように思っているんです。そんな人が、私のまだ行ったことのない北の地で、日々ふだん（普段から不断）の努力を重ねながら自前メディアを発信している。その継続の事実が、私を励ましてくれています。

２０１５年夏の安保国会、憲法と民主主義が踏みにじられていく危機感に、無我夢中で「わたしとあなたの・けんぽうBOOK」を書きました。憲法の専門家じゃない、一市民の私がふだん着の言葉で綴った、憲法はじめの一歩の冊子です。

このけんぽうBOOKを介して、全国各地の憲法のおはなし出前によんでいただきました。出前先ではいつも、あなたもわたしも、ほかの誰ともとりかえのきかない存在なんだよ、という13条と、ふだんの努力の「12条する」を、二つでひとつのセットとして語っています。

「ひとりでもできる市民運動」のみなこさんの通信はまさしくみなこさんの「１２条する」ですし、通信を読んで社会を知ることや、いい本、いい映画情報などまわりに知らせていくこともまた、読み手さんの12条する、ですね。

私は今、家で週に一度ひらく「紅茶の時間」を続けながら、けんぽうBOOK続編の「けんぽうBOOKぷらす」を書いているところです。私なりの9条改憲案の読み解きもあるけれど、全体的にはまるで、憲法で紡いだ物語になりそうな不思議な予感がしています。本が書けたらまたお知らせしますね。

（石川県津幡町・「いのみら通信」発行人）

二つの大仕事 梅沢俊

人生の残りが僅かとなってしまった。悔いのない人生なんてありえないが、なるべくそれに近い終わり方をしたいものである。そう考えたとき、植物写真家としてやり残した2つの大仕事がずっと気になっていたのである。

ひとつはこれから主流となるであろうＡＰＧという分子生物学的分類体系による図鑑つくりである。何だか難しそうだが、今流行りの？ＤＮＡを用いた分類体系と言ってよいだろう。道内での出版の動きがないので、シダの図鑑同様また私が鈴付け役をやってしまった。

予定よりずい分遅れ２年以上を費やしてしまったが、何とか形にすることができた。この駄文の載る「銀河通信」が発行されるころには書店に並んでいるはず。Ｂ５判４００ページの図鑑だから携行はもちろん立ち読みも重くて難しいよ（笑）。机の上でじっくり見てほしい。写真と引き出し線を多用して分かりやすいようにずい分工夫したつもりなのだから。

もひとつは、山を少しはかじった者としてはやはりヒマラヤである。写真によるプラント・ハンティング。〝幻〟的な花を探し出して記録に残すのである。雨季のヒマラヤ歩きは山の展望が望めず、苦労も多いので、訪れる人は少ない。未知の世界で未知の花を探すのは楽しいけれど、時に命がけでもある。

２０１５年はブータンの東端、標高４０００㍍地点で突然意識を失った。４日も費やして首都ティンプーの病院に運ばれ、頭蓋骨に穴を開けて血を抜く手術を受けた。亜急性硬膜下血腫、ブータンでこの手術ができるようになってまだ日は浅いということだった。全く悪運の強い男ではあることは自覚をせざるをえないのである。こんな旅が３０年も続いた「銀河通信」のように支持されるかどうか分らないが、もう少し続けるつもりである。

（札幌市・植物写真家）

ヒマラヤで未知の花を撮影中の筆者

北海道の草花

梅沢俊著　北海道新聞社　3,888円

北海道で見られる草花と小低木約１９５０種、写真約３７５０点収録。一種ごとに引き出し線を付け、特徴や見分け方などを道内で観察できるほとんどの草花について解説しています。

梅沢俊さんとの出会いは１９９７年、夕張岳での高山植物の大量盗掘が起きて、全道の自然保護団体、山岳団体などで北海道高山植物盗掘防止ネットワークを立ち上げたときでした。山歩きで遭遇した貴重な高山植物や、人との出会いなど、ユーモアたっぷりで語る講演が毎回楽しみでした。

しばらく姿を拝見していないと心配していたら、ブータンで九死に一生を得たことを知りました。でも見事に復活されて、４５年間の集大成の図鑑が完成しました。ダイニングでいつも眺めています。是非、お手元に置いて楽しんでいただきたい一冊です。

チェルノブイリから続く道
野村保子

建設中の大間原発

１９８６年４月２６日、チェルノブイリ原発事故は小さな子の母だった私に衝撃でした。ヨーロッパ全土に放射能汚染が広がり、イタリアのパスタやブルガリアのジャムが食べられないと覚悟しました。しかし１週間後日本で母乳から放射能が検出されたのです。チェルノブイリから８０００キロ離れた日本に放射能が届いたのです。無農薬野菜の共同購入をしていた私は土が一瞬で汚染される原発事故の恐ろしさが身にしみました。原発のことを学び始めた頃、対岸の大間町に原発建設とのニュースが流れました。津軽海峡を挟んで目の前に原発が立つことを認めることができず、大間原発に反対し始めました。最終的に大間原発は出力１３８万キロワット、改良型沸騰水型軽水炉ABWRとなり国内最大規模の原発計画でした。

２００８年、国は建設許可を出し５月に工事が始ったのです。２０１０年７月、函館市民を中心に１６７名が函館地裁に大間原発建設差し止めを求めて提訴し裁判が始まりました。裁判は昨年６月結審し、今年３月１９日函館地裁は我々の訴えを棄却しました。棄却の理由は「原子力規制委員会によって審査中であり、運転を開始するめどが立っていない時点で重大事故発生の危険は認められず建設・運転の差し止めは困難」と。まるで門前払いとでもいうべき判決内容でした。足掛け８年の審議は何だったのでしょう。判決はまた原発の安全性は規制委員会が決めるべきで司法は規制委員会の基準の科学的知見の合理性を見るべきであり、日本の基準は世界基準に合わせて合理的であると結論づけました。しかし原発の安全性は科学だけで判断すべきものでないことは福島原発事故が教えてくれました。原発による放射能汚染は被曝による身体への影響とともに故郷に住むことができず一家離散、仕事を失い自律的生活が困難、地域そのものが消滅する現実などあらゆる方面からそこに住む人たちの暮らしを追い詰めてきました。原発事故による多方面の影響を見据えて人が生きる幸せを追求して欲しかった。規制委員会の基準は科学的工学的なものであり人の幸福度を図るものでありません。そこに原発の安全性を一任する怖さを判決に感じました。私たちは札幌高裁に控訴しました。札幌の弁護士を加えた新たな弁護団を形成し大間原発の建設差し止めを求めて控訴審に臨みます。控訴審は札幌高裁で２０１８年１２月１１日午後１時３０分からと暫定的に決定いたしました。是非、傍聴にいらしてください。

（函館市・「大間とわたしたち・未来につながる会」）

家族９人、関東から北海道への放射能避難者です。
中村由紀男

私たち夫婦は、５年ほど前に埼玉から北海道へ移住してきました。僕自身は北海道を好きになったのが理由の半分なのですが、他の家族はほぼ100%、放射能からの避難が理由です。こう言うと「何故？」と思う人が世の中では大半だと思いますが、福島や東北に限らず、関東でもホットスポットがたくさんあり、土壌や海洋汚染から来る食品の汚染が心配なのです。

東京から事故後いち早く移住した息子の子は最重度重複障害児であり、東京に降り注いだ放射能の雨をモロに受けましたし、「避難所」はこういう子が過ごせる所ではないのです。小さい子を持つ娘は、大企業のエンジニアであった夫を２年以上説得して、栃木県から避難してきました。家庭菜園の土壌を測ってみると７０ベクレル（以下Bq）近くもあったのです。土の汚染は小さい子どもが遊ぶのにも心配です。

一般食品に対する政府の基準は１００Bqです。９９Bq以下なら普通に出回ってるということです。実際、厚労省が発表したデータでさえ、放射能が検出されている例がたくさんあります。１００Bqというのは事故前なら、放射性廃棄物として管理が必要なレベルだったのに。放射線被曝には外部被曝と内部被曝がありますがここでは内部被曝を説明すると「燃えさかる薪を小さく粉砕して、口から飲み込むこと。」となります。内部被曝は体内にとどまった放射性物質が長期間にわたって強力なβ線（電子線）やα線（原子核線）で至近距離の細胞を破壊するのです。この危険な内部被曝を、いわゆる〝原子力ムラ〟の人々は軽視もしくは無視します。ですから北海道でも純粋な道産以外の食品には注意したほうが良いのです。

でも、終の住処に北海道を選んで、僕は良かったと思ってます。食べ物は美味しいし、空気まで美味しい！　空間に余裕があって、大地の広がりを感じます。白鳥など渡り鳥の飛翔を間近に見ることができるし、我が家の庭にも小鳥や小動物がよく訪れます。人間もおおらかな人が多い。タバコを吸う人が多いのにはびっくりしてますが。

こちらに来ていろんなことを始めました。「真実(ホント)を知る会」「懐かしい未来をつくる会」「子どもの居場所をつくる会」「個人の尊重と平和を守る会」など。それができたのは、いろんな素晴らしい人たちとの出逢いがあったからです。これから出逢う方、よろしくお願いします。（長沼町・泊原発の廃炉をめざす会）

「戦争させない市民の風・北海道」のライブ隊としてあちこちに出没。右から３人目が筆者

3.11福島原発事故から７年 阿部一子

福島市森合町の仮置き場（撮影・堀泰雄さん）

むずかしいことをやさしく、やさしいことを深く、深いことを興味深く（面白く）伝えてくださる銀河通信、もう３０年になるのですね。

１９９０年４月、夫の実家の梨や（梨農園）の後を継ぐと決めて、福島へ来て、引っ越しのあいさつを兼ねて「阿部農園だより」を書いたのが始まりで、それから２８年。イイカゲンとテキトーをモットーに書ける時に通信を書いています。通信を作る楽しさもあるのですが、作る大変さも実感しているので、定期的に３０年間、盛りだくさんの内容で続けてこられたことに敬意と拍手を贈ります。すごいな～の一言につきます。

私は福島に住んでいますので、福島市の今を少しだけ書こうと思います。

東京電力福島第一原子力発電所の事故から７年が過ぎました。あっという間の７年でした。多くの人に支えていただきながら、今も梨やをしています。

２０１１年の夏休みが終わる前までに、市内の幼稚園、保育園、学校の校庭は表土を５ｃｍ削り、土のう袋にいれて校庭に埋めました。土のう袋の耐用年数は３年と言われていて、３年以内に運び出すはずでした。６月の市政だよりによると、平成３１年の年度末までに仮置き場へ移動し、それから中間貯蔵施設へ搬入を進めると書いてありました。耐用年数３年は直接紫外線をあび、直射日光に晒された場合で、土の中に埋めてあるものは５～６年は大丈夫だろうと市の職員が説明しましたが、２０１５年から始まったパイロット輸送では、１３、０００袋運ぶ際に６、８４３袋が劣化していたといいます。私の住む所には仮置き場がないので、住宅除染で出た汚染土はすべて現場管理になっていて、広い庭のある家は庭に穴を掘って埋めていますが、狭い庭の所は、円柱のコンクリートボックスに入れたり、ブルーシートをかぶせて敷地内に置かれています。生活の場に汚染土があり、そこで日常の生活が営まれています。ブルーシートのある風景が見慣れたものになっているのが悲しいというか、悔しいというか、口惜しい気持ちでいっぱいです。こんな中で生活をしながらの梨やですが・・・。福島で梨やをやっていて良かった！！と心から思えた７年間でもありました。

銀河通信、毎回楽しみにしています。お体に気をつけて末永く続けてください。（福島市）

流されないで自分の頭で考えよう ハンナ・アーレントに学ぶ 太田朋子

３０周年おめでとうございます。
創刊時の読者２０人のうちの一人という古株です。（読者は夫と私の２人です）

何を書こうと悩んでいた矢先、テレビで「銀河通信」にも紹介されている石牟礼道子さんの特集番組を見ました。

石牟礼さんが丸の内のビルの谷間で座り込みをしていた時に、アスファルトを一生けんめい引っ掻いて自分の糞に土をかけようとする猫を見つけ、都会では土が覆い隠されていることに気づいたというお話に、溜飲が下がる思いがしました。

土を閉じ込めたアスファルトや川を覆った暗渠、こんな不自然に違和感を覚えず暮らしている自分を反省し、昔買った『苦海浄土』を探したのですが、見当たりません。本棚では『東京に原発を！』『沈黙の春』『高木仁三郎講義録』等々が埃をかぶっていました。

チェルノブイリ直後の旭川で原発反対の市民の会に参加し、東京で原子力資料情報室主催の「出前講師養成講座」に通い、現在は生活クラブ生協のお店で働いています。「エコな暮らし」をいつも頭の片隅に置いてきたつもりですが、「自分にとっての３０年」と言われ、たじろぎながらの投稿です。

頭の片隅といえば、みな子さんと一緒に岩波ホールで映画『ハンナ・アーレント』を見て以来、「自分の頭で考える」というフレーズがいつも鳴り響いています。みな子さんを恨みながらパソコンに向かいましたが振り返る機会を与えてくれたことに感謝。（鎌倉市・友人）

「銀河通信」は北から届く一陣の涼風 有田美江

北海道を離れて７年が過ぎました。故郷を離れても、心がいつも結びついているのは北海道と沖縄の人、と聞いたことがあります。やまぼうしの白やピンクの蝶のような花をみかけると、「ライラックのほうが香りがあるワ」。那須連山を眺めると「日高山脈のほうが断然悠々としている」などと、どさんこの私は思ってしまいます。（やまぼうしさん、那須連山さん、ごめんなさい）

そんな日々に、北から届く「銀河通信」は一陣の涼風。でもこの風はさまざまなことをじっくり考えさせてくれます。樋口さんの人柄がかもす温かな語り口、でも実は相当スルドイ。なによりも、一人で歩いて見て考えて書いているから、きっちりと肝が据わっています。季節の草花の可憐な写真、山歩きの風景、封切り映画の熱い紹介、知らなければならない講演会の要約と、わずか８ページの紙

面の中にぎっしりと樋口さんの心が込められています。３０周年おめでとうございます。
（那須塩原市）

自然の素晴らしさ、厳しさを学んだことは私の生きる力　宮本紀子

大根の芽

「銀河通信」創刊の頃、私は東京での生活を始めたばかり、１歳と3歳の子育てと仕事に必死でした。
その頃は我が家の周りにも空き地があり、小さな庭には金魚の池もありました。それからどんどん変化して、空き地は無くなり庭のある大きな家はマンションまたは数軒の小さな戸建の家になり、コンクリートの世界になってしまいました。自然を感じられない中で私は子育てと仕事と介護に追われてきました。
でも幸せなことに北海道の実家に夏も冬も１０日間ほど里帰りして、心身をリフレッシュ出来ました。自然の中に身を置くことの大切さを感じてきました。更に、北海道で育ったこと、大雪と石狩の自然を守る会で自然の素晴らしさ・厳しさを学んだことは私の生きる力になっていました。待つこと、無理しないこと、耐えること、生物の生きる力の見事さに思いをはせること…。
「銀河通信」が届くとまず山行の記事を見、その様子を思い描き、エネルギーをもらいました。
高層マンションに住む人は外に出かける機会が少なくて、孤立化しやすい。子どもも外遊びがなくて心身の発達への影響があるのではと、言われ始めた頃でもありました。地域のつながりも希薄になり、子育てに困難を感じる人が増える中、子育て支援は健康づくり、地域づくりの私の仕事（保健師）の中で大きなウエイトを占めてきました。
人はありのままを受け入れられ、存在を喜ばれて育てば自尊心が育まれ、自分らしく安定して生きて行けると思うのです。大人になっての高齢者になってからの心の不調に、子どもの頃からの育ちが影響していることも感じてきました。「子どもの生きる力を信じて待つ」ことの大切さを伝えることに力を注いできましたが、ゆとりの無くなってきた社会の中で発達の個人差を受け止め、見守り、ゆったり対応することは出来にくくなっています。
そして定年、今年は４番目の子が社会人になり介護も子育ても終わりました。この先をどう生きるのか。晴耕雨読の生活と共に今まで積み上げてきた自分を活かせることはあるのだろうか？と模索中です。（中野区・友人）

嬉しい偶然　安川誠二

羅臼岳山頂でくつろぐ学生時代の筆者（左から２人目）

「だれか札幌に行く者はいないか？」そう社長が会議の場で切り出したのは１９８８年の春だった。
当時私は東京にある小さなコメ流通業界紙の記者をしていた。入社して３年が経とうかという若手だったが、札幌に支局を新設するという社長の発言に思わず胸の鼓動が高まった。「北海道で暮らせるのか」と。
その会議には３０人ほどの社員が集まっていたが、だれ一人手を挙げなかった。周りを恐る恐る見渡すと、どうも先輩たちは引き気味、というより「遠く離れた北海道かよ」といった顔つきで「どん引き」、と表現した方がよいかもしれない。そんな先輩たちをよそに、私の脳裏には大学３年のワンダーフォーゲル部の夏合宿で登った知床連山、斜里岳、雄阿寒・雌阿寒岳の雄大な山々がどど、どーんと広がっていた。
「行きたい者はいないのか」。静まり返る会議の場に社長の声が再び響いた。「北海道の山にまた登れるチャンスではないか！」との思いを抑えきれなかった私は、仕事のことなどはまったくお構いなしに気が付いたら手を挙げていた。「お、安川。行きたいのはお前だけか。よし、決まりだ」。その社長の言葉に「はい」とだけ返事をしたものの、心の中では跳び上がらんばかりに喜んだのは言うまでもない。そして札幌に着任したのがその年の７月で「銀河通信」の発行が始まった同じ月、２７歳と２カ月の時だった。
ほどなくして私はその業界紙を辞めて、２０年ほど地元紙の記者を続け、今は農業専門紙の記者として、北海道に根をおろして暮らしている。１９８８年７月という同じ年の同じ月に、私は北海道に移住し、樋口さんは「銀河通信」を創刊した。偶然といえばそれまでだが、私にとってこんなにうれしい偶然はない。（札幌市・農業専門紙記者）

ぎんがつうしん３０　さかい廣

ぎらぎらと光る人では決してなく
ん、稀有な女性（ひと）です〝樋口さん〟
がんばり続けて
つらぬいた
うらましいよな正義感！
しんらいしてます〝みな子さん〟
ん、青い空、山、樹々、花々、鳥も夕陽も
　　祝ってる
３０周年の記念号よ　（札幌市）

「銀河通信」から私たちが生きた時代を振り返る　高橋儁

樋口みな子さん編集の「銀河通信」は今年２０１８年の７月１０日で実に創刊３０周年を迎える事になりました。凄いとしか言いようがありません。（写真は２０１７年４月１５日の２００号祝賀会の参加者）

創刊された時代はどの様な時代だったのでしょうか。１９８８年前後には一体どんな事があって、どんな事が日本や世界で巻き起こっていたのでしょうか。１９８６年にはスペースシャトルが爆発したり、フィリピン政変がありアキノ女史が大統領に就任したり、そして樋口さんが銀河通信を発刊しようとするに大きな動機付けになったチェルノブイリ原子力発電所で爆発事故が起こったり、１９８５年に起きた日航ジャンボ機墜落事故で５２０名もの犠牲者が出たり、１９８７年の大韓航空機爆破事件の発生、１９８７年の利根川進氏のノーベル生理学・医学賞の受賞、そして１９８８年に表面化したリクルート事件、１９８９年には中国天安門事件が勃発、ベルリンの壁が事実上崩壊し消滅したり、更に昭和天皇崩御、元号が昭和から平成と変わって行った時代です。時の総理は中曽根から竹下へ、竹下から宇野へ、宇野から海部へと変わって行きました。

そんな時代の中で樋口さんは「銀河通信」の創刊を決意したのです。引き金になったのは先ほども触れたチェリノブイリ原発事故だったそうです。チェリノブイリの大惨事に衝撃を受け「原発の無い社会で暮らしたい」と強く思い、その事と関連して、平和や原発、自然保護の問題、人権問題などの運動にも関わるようになり親しい友人に小さい声として伝える事を始めたのが「銀河通信」の始まりだそうです。樋口さんは日ごとの思いを「銀河通信」に綴られ、３０年もの長き月日を歩んで来られ、今や６００名を越える読者に生きて行くヒントや方向を与えてくれているような気がします。長い間、編集を継続させて来た重圧は筆舌に尽くせないものがあると思いますが、私も微力ながら樋口さんの「銀河通信」を応援していきますので、時々は小休止しながら、益々ご活躍下さいます様お願いいたします。

先ずは３０周年おめでとうございます。

（札幌市・自分塾通信発行人）

エスペラントで世界を変える　堀泰雄

フランスで福島原発事故の講演会を行う筆者（中央）

私は、父がエスペランチストだったので、若いころからエスペラントに親しんでいたが、それは趣味の領域、理念の領域でしかなかった。それではいけないと、今から２５年ほど前から真剣に勉強を始め実力をあげるために「日本からの報告」という題で、世界のエスペランチストに向けて日本の紹介記事を送り始めた。記事をまとめてRaporto j el Japanio（ラポルトイ　エル　ヤパニーオ）という本を毎年出し今年で２１冊目になった。この本が本当に意味を持ち始めたのは東日本大震災、福島原発事故からである。

震災の年にはほとんど震災にしか関心が持てなくなり、思うことは震災であり原発事故である。それで、私の「報告」も、それが中心になった。原発事故は、海外の人にも衝撃を与え、福島の現状を知りたがった。そのこともあって、震災から３年間、毎年２０日間ほど、フランス各地を回ってエスペラントで講演を行った。私の「報告」は、フランスのエスペランチストの手でフランス語に翻訳され、反原発団体などへ転送された。私はこのころから、私のエスペラントの報告活動で、世界を変えたいと思うようになった。そして本当に変えているという実感を持った便りが２０１５年春、フランスから来た。「パリのビクトル・ユーゴ劇場で『Fukushima、work in progress』という演劇が５月に３日間上演されるが、そのもとになったのは、あなたが翻訳した福島第一原発所長だった吉田昌郎の政府事故調報告である」というのだ。そのホームページを開いて見ると確かにYasuo Horiと出てくる。この演劇はその後も、各地で行われているようだ。私の翻訳が演劇になりそれを多くのフランス人が見ている！小さいかもしれないが、確かに世界を変えている！

エスペラントは英語に比べると、使い手は圧倒的に少ないが、世界にネットワークが広がっている。エスペランチストは信頼できる人々であり、平和への願いの強い人たちである。この人たちと手を携えて行けば、エスペラントで世界は変えられる。今、私の中に、この思いが確固として根付いている。残りの人生は短いが、力の限り、エスペラントでの平和活動、エスペラントで世界を変える運動をして行きたいと決意している。（９ページに続く）

*エスペランントを学びたい人は連絡をください。インターネット上の講座、日本各地のエスペラント会を紹介します。
（前橋市・エスペラント作家）
連絡先　電話：027-253-2524
<hori-zonto@water.sannet.ne.jp>

オーロラを見た感動！　但馬桂子

2016.8 アラスカのオーロラ

２０１６年８月末に友人と二人で、成田経由、シアトル乗継でアンカレッジに行きました。一緒に行った友人は　オーロラの写真撮影６回目のベテランです。　今回は湖に映ったオーロラを写真に収めたいという目的でした。

アラスカ出発前の２カ月前位から、友人の一眼レフのカメラと広角レンズや魚眼レンズ、大きな三脚、自動シャッターなどをすべて貸してもらい、野幌の街灯のないくらい場所を二人で探して星空を撮る練習をしました。

アンカレッジに着くと、友人が以前にオーロラ撮影でお世話になったアラスカ在住の日本人のWさんに迎えにきていただきました。Wさんには自前の大きなキャンピングカーで、１０日間約１０００ｋｍ以上の運転をしていただき、一緒にオーロラの撮影や星座の観察、ブルーベリー摘みや氷河歩き体験、白頭鷲観察、道路に出るムースの観察などすべてお世話になりました。ちなみにアラスカは、アメリカに住む方々の避暑地として人気でお金持ちか現地の民族の方々が中心でした。まだ白夜が残り、夜８時でも明るい状態です。

夜９時半、「オーロラだー」とWさんが車からカメラを持って飛び出していきました。私たちも急いで、フリースとスパッツにカッパを着て６ｋｇもある三脚とカメラと椅子を持って、湖の湖畔にカメラを設置しました。まったく雲も月もなく満天の星です。大きな魚が１ｍくらい飛び上がって、私の体はびしょぬれに。湖の対面に小さな起伏が山のようになって、その上の大空にオーロラが、黄色や緑の流れが伸びて楕円形の形になったり　雲が流れるようになったり一時も静止はありません。そのうちWさんが「赤が出てきたよ」というのですが、肉眼ではわかりません。オーロラはレンズを通してみると綺麗にみえます。銀河の流れがオーロラの反対の空で　くっきりと瞬き、天空は星が空いっぱいに見えます。朝の４時まで３日間　オーロラ撮影をしていました。湖のどこかで　オオカミの遠吠え、ビーバーがばしゃばしゃと音を立てて泳いでいます。また魚の飛び上がる音と静寂の中、どの動物もオーロラが見える喜びを表しているような気がしました。

空の星座がどんどん動いていくのがわかる体験は初めてでした。今回はオーロラ爆発も見ることができ、赤やピンクのオーロラや湖に映るオーロラ、星の中に見えるオーロラ、オーロラカーテン、たくさんの流れ星、Wさんも素晴らしいオーロラだったというくらいでした。地球に現れるこの現象を　忘れることはないでしょう！　　（江別市）

「北海道の百名山」がベストセラーに　高澤光雄

樋口みな子さんは「銀河通信」を発行してから３０周年になるのですね。日本山岳会会員として長年にわたって山に同行したり、２００７年４月に発行した「北海道中央分水嶺踏査　余話」の編集に携わりありがとうございました。

私も何冊か著書を出版していますが、その新刊を「銀河通信」で紹介され深謝します。

私は１９５１年に丸善（株）札幌支店に入社。書籍販売を担当し、戦後間もなく出版された深田久弥著「をちこちの山」、そして様々な文庫本も出版され、販売に意を尽くしました。

１９６０年９月に、深田さんと初めて礼文岳に同行。その後、来道の都度にご一緒しました。深田さんは色紙に「読み、歩き、書いた」と揮毫されました。私はそれに刺激され定年退職後は「読み、登り、書き、売った」と自分の本作りに専念しました。

私は１９９８年４月に北海道新聞社に勤務し「道新スポーツ」紙に北海道百名山を百人の執筆者に依頼し連載。完結後２０００年５月に北海道新聞社から「北海道の百名山」を出版、その年のベストセラーになりました。

朝日新聞社北海道支社センターの記者、植村隆氏が「朝日新聞」に２０１０年１月１日から「北の龍馬たち　坂本家の人々」が連載され、翌年２月３日から「坂本直行物語」が２０回連載され、私が所持する資料を提供しました。植村氏の薦めで、坂本直行著「はるかなるヒマラヤ　自伝と紀行」を、私が編集して、２０１１年７月１２日に北海道出版企画センターから発行、それに植村氏が「坂本直行とその一族をめぐって」を寄稿して下さいました。

北海道には様々な登山と歴史があります。それらを纏め「北方新書　第１４号　北海道の登山史探求」を２０１１年６月１０日に北海道出版企画センターから発行しました。

昨年は東京の白山書房から「北海道の山を登る」を６月２５日、「深田久弥と北海道の山」を１１月２０日に発行しました。その縁で石川県の「深田久弥山の文化館」で６月に講演しました。（札幌市・日本山書の会）

水俣にもつながるイトムカに慰霊碑を　木村玲子

筆者が描いた旧イトムカ水銀鉱山の選別鉱場

私と「銀河通信」を結び付てくれたのは、みな子さんの息子さんでした。高校生の彼はお母さんに似て、感受性豊かで本の好きな、様々なことに好奇心いっぱいの少年でした。

そのお母さんが発行している個人通信の「銀河通信」は、当時すでに山歩きをしながらの自然保護運動や、幅の広い市民運動のこと、本や映画の批評も満載で、私も時折山に登っていたこともあって、感心すると同時にすっかり共感してしまいました。

以来、彼が卒業してからも、時折の集会などでみな子さんとお会いし、カメラを抱えて頑張って取材している姿を見ては、勇気づけられても来ました。

最近、石牟礼道子さんの訃報で、改めてみな子さんと〝水俣病〟との関りを知り、私との接点のようなものを感じています。

私は「イトムカ」という、今はなくなった水銀鉱山町の出身で、今そこで戦時中に苛酷な労働を強いられ犠牲になった朝鮮人や中国人の慰霊碑を建てる運動を始めています。

この水銀鉱山から採掘された無機水銀が、一部水俣の窒素工場に送られ、有機水銀となってあの水俣病が発生したのです。イトムカは、そうした水銀公害が社会問題化し始めた１９７３年閉山になり、町は無くなりました。鉱脈の枯渇とか、貿易自由化などの要因を言いますが、何よりも水銀による公害が最大の背景でした。

今はそこで、乾電池処理などのリサイクル工場が稼働しており、故郷の面影をわずかに感じながら何とか慰霊碑（記念碑）を建てられないかと、心ある人々と共に動いています。そんなところにも、みな子さんの「銀河通信」との接点を再認識しているところです。

３０周年という、素晴らしい地道な営みに拍手するとともに、その力に励まされている人は私だけではないでしょう。自然を愛し、平和を脅かす権力と対峙し、体調とも対話しながら長く続けられることを願ってやみません。（札幌市）

「平和と人権」を忘れずに今日もペンを持つ　大瀧哲彰

「人々の平和と人権を守るのがジャーナリストの仕事だ」。尊敬するジャーナリストに与えられた言葉だ。愛用している紺色の手帳の表紙に赤いペンで書き留めた。記者という道に迷ったときには、いつでも見返せるようにと。

広島で記者生活を始めて、２カ月が経過した。部屋の目の前には平和記念公園が広がる。広島の朝は涼しい風が吹く。７３年前の８月６日、今自分が立っているこの場所で起きたことを忘れないために、毎朝の通勤は、原爆ドームの前を通るのが日課だ。

学生時代は函館で過ごした。開発途上国の教育支援について学び訪れた国は３１カ国。シリア難民キャンプでの難民支援事業やカンボジアの英語教育支援など、多くのことに関わらせてもらった。学生生活は自分と向き合う機会が多くあり、充実していた。

一方で、広島での生活は毎日がめまぐるしい。事件が起きたらすぐに現場へ。２カ月間で、火災、交通事故、災害、殺人…多くの現場を経験した。広島は４月から事件が絶えない。気がついたら一日が終わっているという日々だ。

ある日、こんな手紙をもらった。「いい記事書いたね」。広島に住むシリア人で、母国の支援をしている方に関する記事だ。何度も取材を重ね１カ月かけて書き上げた記事だった。どんな記事でも確実に読んでくれている人がいる。話を聞かせてくれる人がいる。記者というのは、本当に面白い仕事だ。

忙しい日々だが、記者になる前に抱いていた理想は、これからも持ち続けていく。「平和と人権」を忘れず今日もペンを持ちたい。また手紙をもらえるように…。

（新聞記者・広島市）

継続・多彩、そして誠実さと優しさ　福島清

「銀河通信」創刊３０年、おめでとうございます。

植村裁判支援活動を通じて、樋口さんの存在と（まだ直接お会いしたことはありませんが…）「銀河通信」を知りました。まだ新米読者です。

創刊３０年と伺って、とびとびですが、バックナンバーを読んでみました。感じたことは「継続させる意思」「テーマの多彩さ」「すべてを貫く誠実さと優しさ」です。何と言っても３０年間も継続していることは、脱帽以外にありません。映画、本、ハイキング、さらに原発問題をはじめ社会と政治の動向と人権問題など、樋口さんが挑戦しているテーマの何と多彩なことでしょうか。そして、それらに対する取り組みの姿勢には、誠実さと優しさが満ちあふれているように感じています。人生１００年の時代です。お元気で継続されること心から期待しています。

お祝いのついでで恐縮ですが、宮澤・レーン・スパイ冤罪事件の真相広める活動に関わっている関係から、資料を紹介させていただきます。この国家権力犯罪は、決して曖昧にしてはならないと思います。そんな立場から「北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の真相を広める会」事務局は、今年1月「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件『総資料総目録』」を発行しました。全文は「真相を広める会」ホームページで公開しています。（次ページへ）

以下からご活用ください。
http://miyazawa-lane.com/library.html#title07
（千代田区・北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の真相を広める会」

今号は紙面の都合で本の紹介ができませんでした。ご了解ください。

写真で辿る３０年の軌跡

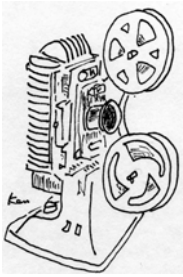
購読料と寄付をありがとうございます
（敬称略）6.1～7.12

福島清（著書も）/山本伸夫/七尾寿子/清水俊子/則末尚大/高永俊（コウ・ヨンジュン）/朴錫俊（パク・ソクジュン）矢間秀次郎/高橋儁/亀田法子/広瀬功/鈴木澄江/新西孝司/梅沢俊（著書）/北嶋節子（著書）/竹田とし子（書籍）合計44,000円は印刷と送料に使わせていただきます。また著書の寄贈もありました。合わせてありがとうございます。今号は３０周年特集号で１２ページです。引き続きのご購読とご支援をお願いします。郵便振替「銀河通信」02740-7-56535

■１９８８年１月、市民科学者の高木仁三郎さんが全国各地で「反原発語り手養成講座」を開講し旭川で受講。（上段左）■学んだことを伝えたいとこの年の７月に「銀河通信」を創刊。■９０年全国機関紙コンクールに応募。家族で沖縄の戦跡を訪ねたルポで優秀賞を受賞。当時毎日新聞論説委員の増田れい子さんが強く推薦してくださいました。（上段中央２枚）■９７年９月、夕張岳で高山植物の大量盗掘が起き、翌年「北海道高山植物盗掘防止ネットワーク」を結成。同年９月、環境庁、文化庁などを訪問し意見書を提出。（右端から下に３枚）■９７年３月に家族でニュージーランドを旅しました。人口より羊の数が多く自然豊か。氷河のマウントクック・トレッキングに感動。（写真２段目）仕事と育児に追われながら山歩きも家族で楽しみました。■２００１年、憲法２４条の草案を書いたベアテ・シロタ・ゴードンさんをインタビューし医療新聞に掲載。男女平等を書いたエピソードに引き込まれました。（３段目中央）■２００３年、登別に「知里幸恵記念館」設立の運動を進めていた頃、芥川賞作家の加藤幸子さんが、講演で札幌でいらしてくださいました。（３段目左から２番目）■２００４年から３年間の北海道中央分水嶺踏査。２００５年５月に踏査した陽光のイソサンヌプリの眺めは最高でした。（下段中央）■２００８年４月、２１日間のヒマラヤ環境調査に参加しました。（下段右）■２０１４年７月、アウシュヴィッツを仲間５人で訪ね人種差別の恐ろしさを、目の当たりにしました。（１８４号をご覧ください）■２０１６年６月、吉岡しげ美さんの弾き語りコンサートを半年がかりで実現。素晴らしい演奏に感動。（下段左から３番目）■２０１８年６月、ラジオカロスサッポロ「コトミラ」に３０１人目のゲストとして出演。パーソナリティは都築啓子さん。銀河通信で何を伝えてきたかを語りました。（３段目左）

万引き家族

是枝裕和監督



東京下町の古い家。おばあちゃんの年金に頼って３世代６人の家族がひっそり暮らしています。年金では足りず、万引きが“家業”になっています。なぜ、少年は学校に行かないんだろうと思っていると、やがて家族の複雑な事情が見えてきます。犯罪と嘘でつながってはいるけれど、夫婦とおばあちゃんは少年と少女に精一杯の愛情を注ぐのです。罪の意識が芽生え始めた少年の哀しみが繊細に描かれていました。ある事件をきっかけに、一家は離散の危機に直面します。血縁のない人たちがそれぞれに深い傷を負いながらも絆を結ぶ家族のありかたに、深く考えさせられました。信代を演じた安藤サクラの哀感が胸に迫りました。この家族にもう一度会いたい。カンヌ国際映画祭で最高賞を受賞。

空飛ぶタイヤ

本木克英監督

大型トレーラーの前輪が突然外れ、主婦の命を奪った事件はある自動車会社のリコールにまで発展しました。この事件を下敷きにした池井戸潤さんの小説「空飛ぶタイヤ」が映画になりました。

原因を整備不良とされた赤松運送は、警察の家宅捜索を受け、マスコミ、顧客、銀行、世間から激しいバッシングを受けます。社長の赤松（長瀬智也）は自社での整備に問題がなかったことを確かめると車体構造の欠陥ではないか、と製造元のホープ自動車に再調査を求めますが全く相手にされず、自ら調査に乗り出します。大企業は、会社の利益を守るためならどんなことでもします。彼らの、人の命みつめようとしない冷酷さに背筋が寒くなりました。公害隠しと同じではありませんか。赤松運送は廃業寸前まで追い詰められます。しかし圧力に屈しません。幾人もの味方が現れ、ホープ自動車の担当課長やホープ銀行の行員や、週刊誌記者らが、リコール隠しの事実を見つけるのです。そこまでの闘いがスリル満点。社員の暮らしを守りたいと、信念を曲げずに突き進む赤松の人間味と勇気を持って真実を追求する姿が爽やか。社長を信じる社員の心意気も良かったです。

焼肉ドラゴン

鄭義信（チョンウィシン）
監督・原作・脚本

1969年から1971年の伊丹空港近くを舞台にした、在日韓国人一家の物語。戦争で左腕を失ったアボジは働いて、働いて今の暮らしを築いたのです。家族で営む焼肉店「ドラゴン」は不法占拠だとして立ち退きを迫られますが、３姉妹はそれぞれの伴侶と、北朝鮮、韓国、日本で生きていくと決意します。

息子が差別による激しいいじめで、学校に通えなくなる姿に胸がえぐられました。どんな時もオモニが、全力で息子を守ろうとする姿に泣けました。アボジは「たとえ昨日がどんなでも明日はきっとええ日になる」という信念で家族を支えてきたのです。どんな逆境にも負けないぞ、という気持ちが伝わってきて、この家族の未来が幸せであってほしいと思いました。戦争と差別。重いテーマなのに泣けて笑えて、最後には爽快にさせてくれました。米朝会談で朝鮮戦争が終戦になるのではと明るい希望が持てました。

フジコ・ヘミングの時間

小松荘一良監督

聴力を失った後、ますます音楽を深く表現し続けるピアニスト、フジコ・ヘミングのドキュメンタリー。８０代のヘミングが、世界を巡る２年間に密着した映像の中で、彼女は失聴した頃や多くの苦難も淡々と語り、どんな逆境にも、夢をあきらめなかった彼女の人間性が浮き彫りになります。クラシカルな家具など好みの品に囲まれ、猫や犬を愛する生活です。たくさんの名曲・名演を堪能しました。特に「ラ・カンパネラ」は素晴らしい演奏で魂を揺さぶられました。

朝日新聞　2018.6.12夕刊

対話ムード続いてほしい

亡父が半島北部出身

トランプ氏と金正恩氏の握手をテレビで見て、在日韓国人のピアニスト崔善愛さん(58)は「この対話ムードがひっくり返らなければいいな」と感じた。米朝首脳会談で朝鮮戦争が終戦に向かうかもしれないことに「父はどう思うだろうか」と想像をめぐらせる。

父の故・崔昌華さんは1930年、朝鮮半島北部で生まれた。45年、日本の敗戦で植民地支配から解放されたが、すぐソ連軍に占領され、キリスト教の信仰を理由に拷問を受けた。釈放後は、北緯38度線を越えて韓国へ。朝鮮戦争休戦後の54年に来日して北九州市の教会で牧師を長く務め、外国人登録証の指紋押捺に反対するなど、在日韓国・朝鮮人の人権を訴えた。

崔善愛さん

95年に64歳で亡くなったが、晩年に「故郷に帰りたい?」と善愛さんが聞くと黙っていた。「少年時代に受けた拷問の恐怖を思い出したのかもしれません」

日本で生まれ育った善愛さんに、父の恐怖は想像もできない。ただ、その心の傷が、日本の支配とその後の朝鮮半島の分断によるものだと考えると、朝鮮戦争が終わるかもしれないことに深い感慨を覚える。

「父の世代には、民族が南北に分かれて殺し合い、家族が引き離された負の記憶が強烈に残っている」

善愛さんは86年から米国の大学に留学。ナチスの迫害を逃れて渡米したユダヤ人音楽家に師事した。在日としての自分の境遇を重ね、「祖国や故郷から引き離された民族の問題を、改めて見つめ直しました」。

北九州市のかつての実家に近い山の中腹に「メモリアルクロス」と呼ばれる十字架が立つ。朝鮮戦争で戦死した国連軍の米兵らの慰霊のため米軍が建立したものと最近知り、「私が育った北九州は朝鮮戦争の歴史とつながっている」と実感した。（編集委員・北野隆一）

崔善愛さんは植村裁判を支える市民の会の共同代表でもあります。米朝会談に対する思いがとても身近に感じました。読んで頂けると嬉しいです。

（転載不可）